様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５００７４９

研究課題名（和文）１９５０～１９７０年代の高知県における市町村民運動会の社会的機能に関する研究

研究課題名（英文）The Social Functions of the Athletic Meetings in Local Communities in Kochi during the Period from the 1950s through the 1960s

研究代表者
清原　泰治（KIYOHARA, YASUHARU）

高知県立大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：００２２５０９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　1950年代、「昭和の大合併」後、地域住民の融和を図ることを目的に、市町村民運動会が開始された。県行政は、運動会で実施する種目を提案したり、自治体に配置した体育指導委員に運営を担わせるなど、市町村民運動会の開催を推進した。
　初期の段階では、地区対抗方式による運営方法のために、住民間の対抗意識が助長され、トラブルが問題となる。主催者は、トラブルを防ぐために、娯楽性の強い種目を取り入れたり、採点方法を工夫するなどして、円滑な実施を図った。このような運営上の工夫もあって、この時期に市町村民運動会は地域に定着する。

研究成果の概要（英文）：　It was in the 1950s that communal athletic meetings were initiated after the Great Mergers of the Showa Era, which represent large-scale mergers of local communities across Japan during that period, in order to promote harmony among people of the newly established community. The prefectural government made attempts to help cities, towns and villages hold their own athletic meetings by proposing new events for meetings and having sports instructors placed in such communities take on administrative work.
　In the beginning, there occurred problems due to administration based on inter-community competition, which caused excessive rivalry among the communities. This led to the sponsors' efforts toward organizing events in smoother ways by adopting more fun-oriented events and devising better methods of scoring. All of these efforts helped communal athletic meetings take full root.

研究分野：体育史

キーワード：戦後体育史　市町村民運動会　高知県　昭和大合併　社会的機能

１．研究開始当初の背景

日本では、明治期から地区運動会が地域の重要なスポーツ・イベントとして継承されてきた。高知県においては、1900 年代になって、県内各地で盛んに開催されるようになる。娯楽の少ない時代に、地域の「ハレの日」として多くの地域住民を集め、その空間はスポーツだけでなく、多様な地域文化の発表の場としても機能した。地区運動会は、地域の祭礼と同様の社会的な意味を持つ地域イベントとして定着した。

しかし、そのような地区運動会についての歴史的な研究成果の蓄積はこれまでほとんどなされてきていない。とりわけ、戦後の地域での運動会の研究については、ほとんど関心が払われてこなかった。

２．研究の目的

高知県では 1950 年代の「昭和の大合併」を契機に、それまで地域住民によって開催されていた地区運動会に加えて、行政が主催する市町村民運動会が実施されるようになった。

高知県内で市町村民運動会が、いつから、どの市町村で実施されるようになったのかを実証的に明らかにすることが、本研究の第一の目的である。

第二に、これらの市町村民運動会が、どのような意図と経緯で始まっているのかを明らかにする。

市町村民運動会は「地域の絆」を強めることを期待して開催されていた。地域スポーツは地域の絆を強めるための、まちづくりを強く意識した活動となる必要がある。市町村民運動会は、地域の連帯を高める機能をどのようにして発揮してきたのか。そのために、どのような仕組み作りがなされていたのか。これらは、市町村民運動会で実施されていた種目や運営方法から明らかにできる。これが第三の目的である。

３．研究の方法

本研究の第一の課題は、高知新聞を主な資料として、各市町村でいつ頃からどのようにして市長村民運動会が始まったかを明らかにすることである。

第二の課題は、当時の市町村民運動会の関係者に証言を得ることである。証言から、行政側の意図や実施体制、地区住民の参加の仕方や開催の意義、運動会の具体的な風景などが明らかにする。

４．研究成果

（1）1945 年～1949 年の市町村民運動会の実施状況

1945 年 12 月 2 日付の高知新聞に、室戸町（現室戸市）で「朗らかな運動会」が開催されたという記事がある。（開催日は不詳）「町民の明朗復興への志気」を高めたと紹介されている。

12 月 12 日には、佐川町で青年団主催の町民合同大運動会の告知記事がある。

翌年 10 月には、須崎町体育会（現須崎市）の主催で、「復活第一回町民大運動会」が開催されているし、11 月には尾川村（現佐川町尾川地区）でも「復活村民運動会」が行われた。

このように、終戦直後から、まるで戦争のない時代を待っていたかのように、各地でさまざまな運動会が復活していく。

高知新聞の運動会関係の記事を拾ってみると、1945 年から 1949 年までの間に実に 69 件もの記事が見られた。

この中で、市町村民運動会に限って見れば、佐川町、須崎町、越知町、窪川町、尾川村、本山町、高岡町、夜須町、佐喜浜町、久礼町、安芸郡、吾桑村、赤岡町、斗賀野村で、町村単位の地区運動会が開かれていた。

戦後の混乱期にあっても、運動会は地域の重要な文化として地域社会に根付き、戦後復興に向けて人々の心を勇気づけ、地域の連帯を強化するための地域行事としての機能を有していた。

（2）1950 年代の市町村民運動会の実施状況

1950 年代になると、市長村民運動会を実施する市町村が急速に増える。高知新聞では毎年 9 月から 12 月にかけて、運動会の記事が紙面を飾った。10 年間の記事の数は 116 件である。「町民運動会」や「村民運動会」「村民体育大会」「親睦大運動会」「部落対抗運動会」等の名称で開催されていた。

その中で、時代の変化とともに名称が変更されている例が少なくない。

例えば、佐川町運動会、斗賀野運動会、尾川村民運動会は、町村合併を経て、佐川町民全体を対象とする町民運動会へと変質していく。

1953 年までに高知新聞で市町村民運動会が報道された市町村は以下のとおりである。

高知市、奈半利町、田野町、川北村、安芸町、伊尾木村、夜須町、赤岡町、前浜村、美良布町、槙山村、高岡町、宇佐町、波介村、戸波村、能津村、大正町、自由川村、弘岡上ノ村、蓮池村、佐川町、斗賀野村、日下村、賀茂村、黒岩村、川内村、越知町、神谷村、梼原町、大杉村、天坪村、東豊永村、西豊永村、本山町、森村、田井村、仁西村、本川村、須崎町、吾桑村、松葉川村、中村町。

1954 年頃から、このような旧町村名が徐々に消えていき、「平成の大合併」前の 53 市町村名が地区運動会の冠になる時期が続く。

（3）高知市民大運動会

第二次世界大戦が終わり、戦後の混乱の中で、高知市の運動会も復活した。1950 年 11 月 23 日、高知市主催の市民体育祭が初めて開催された。

「戦災に次ぐ震災の悪条件を克服して立ちあがりつつある現在の市民が和気あいあい

のうちに高知市を再建し明朗な市民生活を樹立するため、その気力と体力を振起し、教養と品位を高めようとするものでありまして、全市民の老も若きもこの一日を楽しもう」というのが市民体育祭の趣旨で、「市民大運動会」もこのイベントに含まれていた。

「市民大運動会」は小学校区対抗で、「対抗競技」と「余暇競技」に分かれている。「対抗競技」では、リレーの他、綱引きや玉入れ、マスト登り、「鯛釣競争」「箸けん競争」「スプーン競争」が行われ、競技ごとに1位7点、2位以下5点、4点、3点と得点が与えられた。一方、「余暇競技」では、パン食い競争、「紙風船送り」、「親子孫リレー」「煙草火つけ競争」といった種目が並んでいるが、得点は与えられない。

当日は早朝から大勢の市民が集まり、市設陸上競技場のスタンドが選手や応援団、観客で埋まり、女装した男性による応援や奴さんの児童応援団も登場したようで、たいへんな盛り上がりだったと「高知市政ニュース」が伝えている。結果は、高須校区が優勝。旭校区が準優勝、三里校区が3位であった。

この運動会は恒例化し、「市民のよきリクリエーション」「市民待望の市民運動会」として定着し継続されていった。

一方で、各校区では「区民運動会」が盛んに開催されていた。1957年11月4日付の高知新聞によれば、11月3日の文化の日に「市民の親睦と健康をねらっての区民運動会は高知市小高坂小学校はじめ各所で開かれ、よい子たちはパパさん、ママさんと一緒にたのしい一日を過した。タイ釣り競走に交じって趣向をこらした仮装行列が人気を呼び、各町ごとに応援団をくりだして熱心な拍手をおくり、なごやかな雰囲気をつくり出していた。」

このような運動会の光景は、高知県内の各地でも見られるようになっていた。1957年9月、高知県教育委員会健康教育課は、「市町村民運動会案」を公表する。(高知新聞、1957年9月17日付)

> 競技種目次の通りで、従来各地区バラバラに行われてきた運動会が、今年からは社会体育的な意味をもち、住民のみんなが参加してたのしく、しかも体育的な内容に満ち、さらに各地域の特殊性を織り込んだ運動会となることが期待されている。
> 百㍍▽おしどり二人三脚▽リレー▽マスト登り▽ロマンス競走(男女が縁結びの札を拾ってコンビをつくるもの)▽借物競走▽樽ころがし▽学童リレー予選▽民謡踊▽職域別、年齢別各リレー予選▽仮装行列▽三代競走(孫、子、親の順)▽応援団コンクール▽紅白玉入れ▽学童リレー▽タイつり▽職域リレー決勝▽年齢別リレー決勝

この案を作成した意図や、上記の種目が選定されている理由は明らかにできない。

この年の7月、同課は各市町村に体育指導委員を配置し、社会体育の推進体制の整備に着手した。その一環として、増え始めた市町村民運動会の「ひな形」を示し、「社会体育」としての意味を持つ地域スポーツ・イベントとしての定着を体育指導委員に委ねたのである。

高知市では40人の体育指導委員が任命されているが、委員は各校区から選出されており、県の示したような運動会が展開されていたことが想像できる。

しかし、実際には、多くの運動会で得点を巡るトラブルが起きていた。1960年代頃、高知市鴨田小学校区の運動会で、事件は起きた。主催者である鴨田体育会役員の証言によれば、当時の同校区の運動会には、30近い地区から住民が集まって、地区(集落)対抗形式で競技が行われていた。種目ごとの勝敗が、地区の得点に反映される。優勝劣敗を競うことになり、判定を巡っていさかいが起きた。当時の運動会では、トラックの周りにむしろやござを敷き、昼食時には自宅からごちそうが届き、酒も入っていたという。酔いの勢いもあって、大きなけんかとなり、結果的には、翌年から運動会が開催されなくなった。

2年ほどしてから、運動会を再開することになったが、トラブルを避けるため地区対抗形式を止め、種目ごとに3位まで、賞品を出すという形式に大会運営方法が変わった。

得点を巡るトラブルは運動会にはつきもので、県内各地でも住民同士のけんかが絶えなかったと言われている。

このように、得点を巡って大きなトラブルが生じた校区では、従来からある地区対抗形式を止めていったが、そういう事件が起きなかった校区や地区対抗形式にこだわった校区では、得点制の運動会の競技方法を継続していった。そういった校区では、体育指導委員のトラブルを避けるための努力は並大抵ではなかった。

(4)池川町民運動会の事例

旧池川町(現仁淀川町池川地区。以下、池川町とする)の「町民運動会」は、1955年に始まっている。もちろんそれ以前にも町内各地で運動会が行われていたのだが、この年から全町民あげての運動会が開催された。

池川町は、1953年の町村合併促進法を契機とする「昭和の大合併」において、合併相手が見つからず合併できなかった。危機感を持った梅木直久町長は、1957年2月発行の「広報いけがわ」(第2号)で、「県下幾十の大町村に互して独立独歩自力本願によって勇往邁進すべき立場と成った」という認識を示している。現状維持の町勢で発展を遂げるためには、町民間の融和が必要であった。

1957年12月1日付の「広報いけがわ」に、梅木町長は、「町民運動会を終わりて」という感想を載せているが、運動会を「本当にうるはしい限りであり、和の象徴であり、美の

極致である。（中略：著者）恐らく池川には現在あれだけの観衆を集める行事は他にはないと思う。四千から五千に垂とする観衆は、開始時刻の九時より、万才三唱の四時半迄、身動きもしない。運動会も年一年と熱もかかり気合も乗ってくるので益々慎重を要すると思うが毎度私の申すように和合であり、親睦であり、慰安であって是非其の場限りであって貰い度い」と述べている。多くの町民が集まり、たいへんな盛り上がり方であったことが推察される。町長が認識している運動会の目的は、「和合」「親睦」「慰安」であり、町民が会場に集まり、親睦の輪を広げていくことを強く期待している。

一方、「運動会のすんだ後迄色々考えて居る方など一人もあろう筈はないが、其の場でも出来る事なら文句なく談笑の裡にやりたいものである。兎に角多少の問題はあるにしても町民運動会は誠に面白い良い事だと思う。（中略：筆者）現在の様に採点も加味しつつ面白くおかしく和気藹々裡に終始する様念願してやまない。」

町民運動会で、看過できない町民間のトラブルが発生したことが読み取れる。

県内で唯一合併できなかったために、梅木町長は町民が心を通わせ、力を合わせることによる町の発展を期待していた。運動会を「融和」のシンボルとしたかったのである。しかし、おそらくは得点競技をめぐるいざこざが発生し、そのトラブルはその場限りでは終わらなかったのだろう。

運動会の目的を達するためには、工夫が必要であった。その一つが「笑い」である。例えば「亭主操縦法　ヒョットコ面に目かくしされた亭主と、両手を綱で連絡しての奥さま、口も使えず『あなた』とどなれも出来ず、思いにまかせぬハンドルならぬ綱さばき、とつとへちへ向けていく旦那さまを、引きもどし引きもどしての誘導ぶり。奥さまも汗だく汗だく。」（広報いけがわ、第 186 号、1972 年 11 月 20 日付）という様子が広報紙で紹介されている。参加している地区ごとの「競争」にはなっているが、見物する側から見れば競技者のパフォーマンスはユーモラスであり、競い合いではあっても、競技者同士の感情的な対立につながる可能性は低い。「笑い」が勝敗へのこだわりを和らげ、運動会の娯楽的な性格を強化し、あわせて、観衆の「怒り」や「対立」の感情を緩和する作用を持っていたことは容易に想像できる。

そして、ほとんどのリレー種目を採点競技から外した。そうすることで、判定をめぐっての地区間のトラブルを避けることができた。

また、一般の他に婦人会や青年、高齢者が出場する種目が用意されており、できるだけ多くの町民が参加できるように工夫がされている。

このように、池川町民運動会は、町内の「融和」を目的に開催され、その考え方に沿って、多くの町民の参加を促すためにも、娯楽性の強い種目が実施されていた。池川町民運動会は、町民間の、また地区住民間のつながりが強まることを意図して企画・運営されたスポーツ・イベントであった。

（5）まとめと今後の課題

本研究においては、高知県内の市町村民運動会が、いつから、どの市町村で実施されるようになったのかを実証的に明らかにすることを目的の一つとしたが、その成果は一部の市町村にとどまり、県内の全市町村について確定することはできなかった。各市町村の広報紙を手がかりに研究を進めようとしたが、広報紙の発行の開始時期が市町村民運動会の開始時期よりも遅かったり、散逸したものも多く、特定ができなかった。

その中でも、市町村民運動会を始めた市町村は、「融和」を大きな目的としていたことが分かる。終戦直後の 1945 年 12 月から地区運動会がいち早く再開されたことは驚きであった。かつて太宰治が著書『津軽』の中で 1944 年の運動会の風景を「古代の神々の豪放な笑いと闊達な舞踏」「華麗なお神楽」（1951 年、新潮社刊、pp.166-167）などと表現しているが、そのような運動会の光景が各地にあり、それが地域の文化として根付いていたことが理解できる。第二次世界大戦下の暗い闇の時代からの復興と、1946 年の南海地震による災禍からの復興という大きな地域課題を抱える高知県にあって、地区運動会は地域住民の絆を強め、連帯意識を高める地域行事として、その社会的機能を発揮する。

このような経験と記憶が行政担当者や地域住民の中に継続され、「昭和の大合併」を経て新しい市町村が誕生したとき、地域づくりに貢献してきた運動会の社会的機能に着目し、その機能が発揮されることを期待して、新しい行政区を対象とする運動会を始めたことが推察される。

しかし、「新しい」市町村民運動会は、旧行政区内のローカリズムを強化することはあっても、新たな同胞意識を形成することは困難であった。そのために、主催者は住民間の対立を回避し、会場内の雰囲気を一つにする工夫をしなければならなかった。その手段が、競技種目への「笑い」の要素の導入であり、採点競技への採用であり、あるいは、「集団間の競争」を廃止し、代わりに「個人の競争」の性質を強めることであった。

このように工夫された市町村民運動会であったが、1970 年代から姿を消していく。少子高齢化に伴い出場する「選手」が減る一方で、娯楽の多様化の中で、運動会の魅力が薄れていくのである。

そして、市町村民運動会はその社会的機能を失い、集団間の人と人とを繋ぐという役割は消失していく。

本研究においては、市町村民運動会に寄せ

られた期待については明らかにすることができたが、実際に地域間の対立がどのように解消され、当初の目的の通りに「融和」を実現するスポーツ・イベントに成長していったかを明らかにすることができていない。また、当初は、証言を映像として記録し資料化することを計画していたが、話者を探すことができず、実現していない。今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計１件）
①清原泰治「1950・60 年代の高知県における市町村民運動会の社会的機能」、日本スポーツ産業学会スポーツ産業史専門分科会「韓・日スポーツ研究者交流研究発表会」、2015 年 3 月 28 日、ソウル市（大韓民国）

６．研究組織
(1)研究代表者
　清原　泰治（KIYOHARA,YASUHARU）
　高知県立大学・地域教育研究センター・教授

研究者番号：00225096